

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第二号（通巻第一三四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第134号

6. 2005

取材記者

品川 鈴子

校了を囃す屋島のほととぎす

チューリップ薬挙ぐ天の園丁へ

走り梅雨しとどの若き取材記者

アロハ貸す濡鼠なる取材記者



梅雨の戸は膨らみ軋む鈴の庵

句教室机に載りて吊り雛

少女期のかの開墾のすかんぽ嚙む

有岡城

手で扱とく二の丸跡の烏麦

鳥の恋城の礎石を褥とし

城跡の上臈塚は青葉の斑



玉 鈴

愛媛 星加 克己

伊予の春今は昔の新居郡
海見ゆとひばりの声は雲間より
水底に苔の食み跡山笑ふ
海峡をわたる鈴の音島四国
少年に蜜を吸はれし紅椿

香川 細川 知子

足湯してのどかに席を詰め合ひぬ
幾年もつかずはなれず雛の距離
直線をまあるく纏ひ春袷
一步ひき生きるのも楽春炬燵

兵庫 細野 恵久

芥子坊主じゅげむじゅげむの声わたる
床の間を這ふげぢげぢの旧家ぶり
マナー全書抜けばくづほれ梅雨の書架
子袋をかかへ土蜘蛛つかへたり

吟

香川 松井 洋子

我が墓地を探して歩く梅日和
末弟の声張り上げて鬼やらふ
卒寿なる行商の来て若布売る
みどりごの爪やはらかに冬苳
草萌やつたひ歩きの用心家

愛媛 松本 恒子

パソコンの世を遠ざけて囀に
長櫃の家紋の焼印春埃
畑打つ音重なりて影二つ
灯笼の笠を飾りし落椿
花しぐれ五橋の切符うすじめり

愛媛 三浦 如水

春の風邪女臥しみて用多き
鼻上げて象の挨拶うららかに
春の星みな生きてみてまたたけり
お河童の額吹き分く春の風

愛媛 三浦 澄江

生も死も書けば一文字寒椿
余生とは流れにまかす春の雲
暮れ際の風よく似合ふ花あしび
ボールペン芯の先にも春が来る

兵庫 三枝 邦光

暫くは縁にさらして古雛
出国の空港ロビー雛の壇
愛染の忿怒を包み春の山
対雛に起居見られし薄明り
よな曇人工島を遠くせり

兵庫 水野 範子

人文字の並ぶ校庭春隣り
方言の尽きること無し春炬燵
フエンス越え飛び込むボール春の泥
押絵雛壁より外し退院す
雪の六甲借景にして席入りす

香川 三橋 早苗

バスに積みたる受験子の人いきれ
持て余す気持ち吸ひ込む春の闇
遠足の園児二列で名画見る
春愁や別れの日また近づきて

和歌山 宮原 利代

膝抜けしジーンズで闊歩春の街
息かけて雛の鏡を指で拭く
御手洗に龍の口より氷柱垂る
熊野路に春の雪積む苔仏

茨城 三輪 慶子

百歳の媪が舞ぞ春遅々と
春シヨール云ひたきことはありながら
河三つ越えて句会へ春遅し
祖母の声聞える如しつくしんぼ
年金の暮し始めむ春の汐

薬草歳時記

(一三三) コウホネ(河骨)

菅原由紀

橋の下闇し河骨の花ともる

山口 青邨

水辺で見かけるコウホネはとても可憐。すいれんやはすの花の咲く水辺ではひっそりと静かな花に見える。

河骨という字を見ると、何だかとても恐ろしい花に思えるが、コウホネという言葉に声をしてみるととてもさわやか。

河骨とは川の中の骨からカワホネ、コウホネと言われるようになった。根茎がゴツゴツして骨のように見える。

北海道から沖縄までの浅い湖沼や小川に分布する。スイレン科の多年草。池底に太さ7〜8センチにもなる根茎をのばして、しっかりと根を張り広がる。

箱根湿生花園を訪れた初夏、黄色の花がキラキラと輝いてとても美しい光景だった。池の緑の水草におおわれていて、水辺の花を探するのは困難だったが、その中に黄色い花は咲いていた。

花に見えるのはガクで5枚の花びら状になっている。は

じめは黄色で後に緑色に変わる。本当の花の花びらは小さくて細い。黄色い雄しべの陰にかくれて見えにくい。

水の中からつき出るようにまん丸いつぼみはかわいらしく、ぽっかりと開いた花は黄金色。

葉の基部は矢じり形にふたつに分かれ、長さ20〜30センチ、多くは水面に出ている。

根茎は川骨の名で漢方薬として用いられる。二つ割にして乾燥して使う。

止血剤や強壯剤。

産前産後の出血や月経不順に川骨を煎じて服用する。他にネムロコウホネ(北海道)、オゼコウホネ(尾瀬ヶ原)、水上に葉を出さないオグラコウホネ等が日本に分布している。

北米産のナガノアメリカコウホネがヨーロッパで栽培され、園芸品種やアクアリウムの水草として輸入されているが、これとの違いのために、学名 *Nuphar japonicum* といひ「日本」を冠する国産種である。

花言葉は「崇高」「美しい人格」

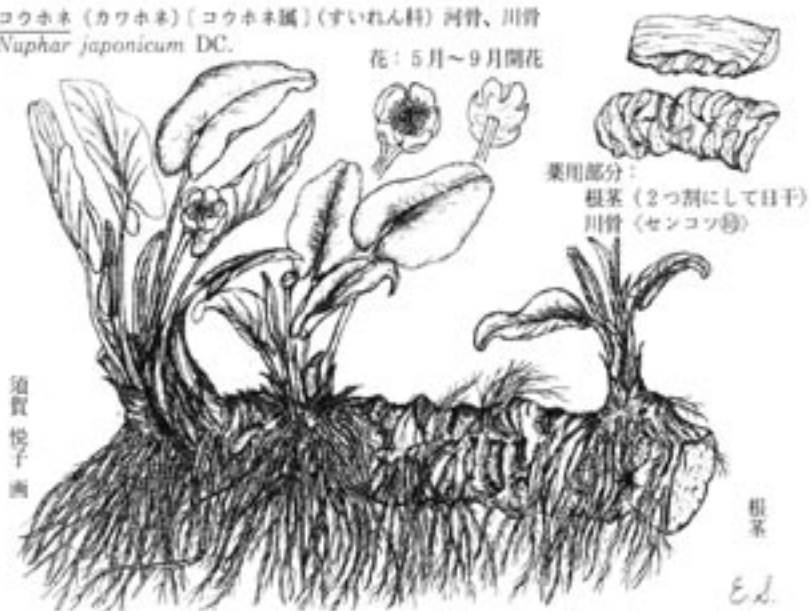
参考文献 「花の歳時記36日」毎日新聞社

「寺崎日本植物図譜」平凡社 他

著者略歴 神戸薬科大学卒

コウホネ (カワホネ) (コウホネ属) (すいれん科) 河骨、川骨
Nuphar japonicum DC.

花：5月～9月開花



河骨は主なる鯉の潜望鏡	河骨の二もと咲くや雨の中
塩出 眞一	与謝 蕪村
堀口 星眠	水渺々河骨茎をかくしけり
柴田白葉女	河骨の花に添ひ浮くぬもりかな
水原秋桜子	河骨の金鈴ふるふ流れかな
富安 風生	河骨や終に開かぬ花盛
山口 素堂	河骨のたかき苔をあげにけり
川端 茅舎	河骨や池それぞれに岳の影
高浜 虚子	河骨に月しろがねをひらきつつ
黒柳 召波	河骨のゆふづく水を乙女踰ゆ

ぐろつげ

鈴の奏

品川鈴子選

柴犬の尻尾きりりと春立つ日 東京 遠藤とも子

裏の犬われになつきて春隣

櫻路のまた一つ落つ雛納め

美しき数式つらね受験生

語尾弱くなりたる兄へ遠雪崩 北海道 森 早和世

墓石の右の肩より雪解急

北窓を開けて手を振る声を張る

米粥の白ふつふつと春愁ひ

天平の蕨に黄砂届きけり 神奈川県 山崎 辰見

ワンテンポ遅るゝに慣れ孕鹿

門前に僧とならびて春の鹿

おじぎしてまたおじぎして鳩の春

取れそうな釘ボウをつれて春の旅 兵庫県 高橋 照葉

日本が端にある地囃鳥雲に

啓蟄の蛇口抜け来て水の色

野の花を添えてやりけり流し雛

父の数珠幼ナが持ちて通夜余寒 大阪 丸 美砂子

二階から豆腐屋を呼ぶ路地余寒

余寒なほ秒針ひびく夕間暮

ひとりなる喪やの家の主あるじ余寒なほ

野を焼くやわれに戦火の記憶なほ 大阪 八田 節子

春寒や生家跡なる蔵一つ

重なりし父母の忌修す露の臺

婚指輪失せたることも春愁ひ

魯山人の若き息吹の春障子 大阪 武田ともこ

ズボン丈すこし短かき卒業歌

マスカラの睫ものうげ胡沙来る

裂けし身を振りて香る盆の梅

ライト設計の館に百年雛 兵庫県 四葉 允子

チューリップ孫せがみ乗る車椅子

梅園の斜面滑りに児等夢中

草青む反芻の牛寝そべって

葱坊主宙に字を画く筆なりし 大阪 藤澤希宗子

適塾の急階段に膝凍てし

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 細川知子 "

*選句は全て 品川鈴子

瓔珞のまた一つ落つ雛納め

遠藤とも子

瓔珞はインドの貴族が珠玉や貴金属を糸で連ねて作った装身具。頭・首・胸にかけ、また仏像などの装飾として、その天蓋や建造物の破風に付ける垂飾など。古い雛を代々受け継ぐ女性は、しきりとは殊に瓔珞を大事に扱いなから包む。なのに又ひとつきらりと零れた装飾のかけら。それは取り戻すことの出来ない貴い時間の象徴かもしれない。

墓石の右の肩より雪解急

森 早和世

「石に蒲団は被せられず」の諺がふと想われる。深い雪を冠る墓は単なる石ではなくて生前の姿と感ずる作者。文筆家などは少し右肩下がり。その肩の辺りが日差にどっと雪解けの兆し、墓の主も「肩の荷を下す」ことでしょう。

ワンテンポ遅るゝに慣れ孕鹿

山崎 辰見

身重になると母性本能で胎児を護るためか、総てのテン

ポがゆっくりと変化するのは人も鹿も同じ。それは動作のみか心にも親となるゆとりを得る証でしょう。

取れそうな釦ボタをつれて春の旅

高橋 照葉

「旅は道連れ世は情け」。取れそうでもとれない糸のゆるんだ釦が旅の道づれとなると、ことさらに困った存在であるにも拘らず、釦が擬人化されるまで旅の連合隊が一人増えたように感じられる。取れかけの釦と共に膝栗毛道中となつたように楽しい句。

ひとりなる喪やの家の主あかじ余寒なほ

丸 美砂子

大切な人を失われた悲しみを気丈に堪え、通夜から四十九日の法要など、弔問客への応対にめまぐるしく緊張の日々が続く。ようやく他の御家族もそれぞれに元の生活に戻り、一段落ついた途端、押し寄せる淋しさが下五の「なほ」に痛切に感じられる。どうぞお気を落とさないで、これからは御自分の心情を句に表現なさって紛らわせるのも一考でないかと思えます。

春寒や生家跡なる蔵一つ

八田 節子

蔵を前にして呆然と立ち尽くしている作者が目には浮かぶ。

久しぶりに故郷に帰ってみると、全てが一変してしまっていて、見覚えのあるはずの生家の建物は無く、ただ蔵のみが残されていた。

眼前のあるがままの実景と、失われた長い時間の経過が読み込まれていて、生家への切ない郷愁が感じられる句。

ズボン丈すこし短かき卒業歌

武田ともこ

入学時小さかった子も、一年に十センチ以上も伸び、卒業の頃となると大人並みの身長になり、脚も長く、見下ろしていた子に、見下ろされる。卒業式も間近になると何処の家庭でも短くなったズボンのまま我慢させることになる。卒業の祝福と感動をズボンの丈に着目しユーモラスにとらえた心温まる句。

ライト設計の館に百年雛

四葉 允子

建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの設計の現存する建物は本国アメリカ以外では、なんと日本にのみ旧帝国ホテル・自由学園・山邑邸と3つの建物が残っている。

日本の美術に造詣の深かったライトのデザインの館に、

百年雛は居場所を得てしつくりとなじみ、ひときわ美しいことと思われる。

お雛様公開の頃に私も是非訪れてみたい。

葱坊主宙に字を画く筆なりし

藤澤希宗子

葱坊主を筆に見立てた観察力が新鮮。葱坊主はたゆまぬ日頃の練習の甲斐あって、さぞかなりの書の腕前と察する。能書家の弘法大師は筆を選ばずと言われているが、流石の弘法大師も葱坊主の筆で字を書いた事は無かったであろうと思う。奇しくも弘法ゆかりの京都東寺の五重塔の切っ先は九条葱の葱坊主がデザインされそびえ建つ。

春旅はひとりと決めて夜の卓

正木 泰子

友達と連れ立つての旅も楽しいが、一人旅も又格別に自由で楽しい。

春旅となると花を尋ねる旅なのでしょうが、それとも親しい人を尋ねる旅か。旅先の地に思いをはせながら、荷物に歳時記と句帳も入れ、服装の準備を整えるのも楽しい。旅を決めた時から早やも旅の始まり。読者も春の旅心を共にする。(以下略)